

「丸善百年史」は、着手以来実に十六年の歳月を閲して、いま漸く三冊の大冊として、公刊される運びとなった。編纂に関係した一人として、筆者は衷心からの喜びを覚えると共に、また多少の感慨なきを得ない。

はじめ会社で百年史編纂のことが企てられてから、幾度か会議が行われたが、それは主として全体の分量、成稿・出版の期日、資料の蒐集、事務機関（社史編纂室）の設置等に関するものであって、その内容・体裁については、すべてこれを主任の木村毅先生に一任した。木村先生はこの点ではまた極めておおまかであって、百年をほぼ四期に等分して、その執筆を先生自身、及び中西・西田・筆者の四人に配当されただけで、叙述の形式は、すべて執筆者の自由に委ねられた。そこで稿成るに及んで、全体の体裁は、やや不統一の観を呈する憾みもないとはいえない。しかし各執筆者は、それぞれ独立した見解を以て叙述したのであるから、善くこれを読む者は、異なった時期の異なった体裁の叙述を通じて、一貫した丸善の世紀の歴史を把握するに、多くの困難を感じないであろう。

通じてこれを見れば、丸善の初代社長早矢有的の理想は、後継者にその人を得たことによって、年と共に次第に実現された。それは近代日本の文化の発展と相伴うというよりも、寧ろこれを先導した点に注目される。この意味からすれば、丸善は実に日本の近代文化の象徴であるといつてよい。

資本金二十六億二千三百万余円、本支店・出張所通算十八カ所、海外の子会社二カ所、社員総数二八三二人、年間売上高六五九億一千万余円、これらの数字は、現在日本の大企業の中で、必ずしも特に誇るべきものでないかも知れない。しかし海外の約五十カ国を越える約二千社の出版会社と、常に直接取引を行なうという供給源の広さは驚異である。丸善の取り扱う輸入書籍のシェーアが総額の半を占める販売網の大きさは絶大である。欧米でやや高価な書籍を購った場合、これを丸善宛に送付することを依頼すれば、殆どの書店は喜んでこれに応ずる。この信用度の高さもまた抜群である。サンソム夫人は丸善を呼んで、*magnificent bookstore* といった。丸善の取扱う商品は、勿論書籍ばかりではない。しかし *magnificent* という言葉は、丸善が自ら喜んで受けるべき形容詞である。

現在日本は世界第一流の文化国家である。しかもそれ故に他国の文化との交流は、以前よりも一層緊密化を要求される。それは知識は、それ自身より豊富に、より多様に、より精緻に、より関連を広汎にすることを求めるからである。この要求を満たすためには、開かれた門から、あらゆるものを吸収する努力が必要である。一步努力を怠れば、それは一日文化の後退を意味する。この努力は全国民に課せられたものであって、一丸善の専らにするものではない。しかし百年の伝統に支えられた丸善の使命は、この間にあって最も重い。ただその使命が来るべき第二十一世紀に於いて、いかなる形に実現されるであろうか。それは今後数十年にして編纂せらるべき本書の続篇に俟つ外はない。

筆を擱くに当って、本書の編纂を発起し推進された司忠前社長並に飯泉新吾現社長に深い敬意を捧げる。また編

纂を董督された故桜井喜代志常務取締役、多くの援助を与えられた八木佐吉本の図書館長に厚い謝意を表する。これと共に社史編纂室の開設以来煩雑な事務に執掌された緒方惟吉、太田幸之助の両主任、特に終始渝らず事に膺られた西村みゆき嬢に、心からの感謝を述べる。